

## オピニオン

## 日本医療のクロスロード

中央区西支部 水谷匡宏

今まさに日本の医療制度は大きな転換期を迎えようとしている。従来の社会保障制度の枠組みのなかで医療制度を堅持していくのか、それとも医療には到底馴染まないと言われていた市場経済の導入に走るのか、まさにこの先の数年間は日本医療のクロスロードと言えるのではなからうか。医療提供体制や疾病構造の変化を踏まえた基本的な見直しの第一弾として、今年4月の医療法改定で40年以上続いた診療報酬本体の上げ幅が右肩上がりの上昇から一転して初のマイナス改定となったのを皮切りに、医療機関の機能や規模に応じたホスピタルフィーと技術評価に関するドクターフィーの創設やDRG/PPSなどによるコスト削減につながる総枠制の導入、さらには支払基金の民間法人化など市場経済政策が次から次と浮上してきている。さらに、見直しの極め付けとして先ごろより総合規制改革会議のワーキンググループの中で、鈴木良男氏を主査とした官製市場の見直し審議が開始された。聞きなれない官製と言う言葉にいささか戸惑いを感じるが、過去に国鉄を今のJRへと民営化させた中心人物ならではの発想と考えると納得できない訳ではないが、それにしても二匹目のドジョウをねらっているようで感じの良い用語ではない。正直に言えばあまりにも安っぽく、薄っぺらな用語で、強い憤りさえ感じる。いままで低医療費を堅持しつつ効率のよさで長寿社会を実現し、世界に誇れる医療制度と唱えられながら、なぜかくの如きに社会保障の枠から引き離そうとするのか、真意が全く理解できないのは私一人だけではあるまい。財源論だけが先行し、今までの医療制度を完全否決するような用語の使用には断固反対である。当然の如くその反対軸には医療関連特区構想を頭

に浮かべない訳にはいかない。この特区構想については日本医師会（日医）は原則反対を、また厚生労働省も反対の意志を表しているが、12月の初旬までには首相に答申され、その中旬には閣議決定される見込みである。先の健保法一部改正時の日医内部の足並みの乱れが今回も再現されるようだと、会員の日医への不信感増強と、日医離れが一層加速されることになりそうである。思い返すと7月末に終了した通常国会では医療費抑制における将来ビジョンについての明確な提示は示されず、一方的な財源論に明け暮れた挙句、老人医療費の完全定率化と来年4月の健保本人の3割負担を織り込んだ健保法の一部改正が無修正のまま強行採決された。本来ならば医療費のコスト削減について単に総枠規制を設けるだけでなく、医療人を含めた国民全体の意識改革が必要のはずである。従来より専門家からは医療現場での無駄な検査、処置、治療の指摘を受けており、医療側はコスト削減に対してさらにもう一段の厳しい取り組みを行わなければ改善への道は開かれないであろう。また最近になって、ドラッグストア協会などの民間産業が医療費削減策としてセルフケア、あるいはセルフメディケーションの取り組みの重要性について盛んにマスコミを通して啓蒙活動を行うようになってきた。現段階においてはその最終責任の所在についての明確な根拠が示されていないため、実施に向けてはきめこまかな整備を行う必要はあるが、この考えの基盤には地域生活者自らが主役になって、与えられる医療から参加する医療へと自立していくことが前提となっている。具体的には、信頼のおけるかかりつけ医師と近隣の薬局（ドラッグストア、調剤を問わず）が医薬を分業するだけ

の事務的な関係に留まるのではなく、むしろ医療を通してトータルに共業することで疾病の予防と早期治療に取り組んでいくことの重要性が示されている。今後の進むべき姿として注目し

たい所である。最後に医療の原点は決して財源から論ずるべきではなく、患者を主体とした社会保障と人命尊重から議論すべきである。

(旭山内科クリニック)

## 齋藤富夫先生 文部科学大臣表彰

平成14年11月7日(木)福井市フェニックスプラザにおいて、第52回全国学校保健研究大会にて、当会会員の齋藤富夫先生が地域医療及び学校保健の向上と発展に大きく寄与した功績により、文部科学大臣表彰を受賞されました。おめでとうございます。

## 島田会長 北海道社会貢献賞受賞

平成14年11月10日(日)に札幌グランドホテルにおいて、北海道医師会創立記念式典会場にて、当会の島田会長が地域の救急医療の確保及び救急医療対策の尽力に寄与した功績により、北海道社会貢献賞を受賞されました。おめでとうございます。